

「子母澤寛文学賞」【大賞】

「夏のおと」 北海道 乾みやこ

うつむいた額からしたたる汗が荒れた肌にしみた。ぼたり、ひりひり。日差しは帽子の薄い布を通して脳天を焼く。じりじり。そう、音がする。坂木絵実子は草むしりの手をとめ、茂ったトマトの陰に腰をおろした。塩の入った麦茶は生ぬるく、喉の渇きをいや増すようだ。四十八年生きてきて夏が好きだったことは一度もない。

隣町の農家に生まれ、夏休みは手伝いに追われた。周りの友達も同じようなもので、学校が始まるのがうれしかったのは絵実子ばかりではなかっただろう。

夫は近くの発電所勤務だが、実家は農家で嫁に来て同じ暮しだ。実際、畑で働くのはそれほど苦にならない。ひとにたち混じるより、作物が育っていくのを見るほうが絵実子は好きだ。秋の収穫の楽しみ、春の期待に満ちた種まき、外で働くのが性にあっている。

ただ、わんわんと響くセミの声、乾いた地面や太陽さえ音をたてるようなうるさい夏。

夏はせわしなく、騒がしいから嫌だ。

汗をぬぐうと、義母のサクが畑の向こうはじでグラジオラスを切っているのが見えた。

仏前に供えるには大げさで派手なその花をサクは好んで育てる。グリア、ひまわり、マリーゴールド。夏に咲く花もあまり好きになれない。大柄で少し太っているサクは膝が痛むせいで、ゆっくりした動作で花を切る。手術を勧めたが、年だから、と聞かない。

一年前に舅の喜市が亡くなってから、もともと寡黙なサクの口がさらに重くなった。二人の子供も就職や大学で家を出てから二人きりで過ごす昼の時間がひどく気づまりで、口下手な絵実子はせっせと畑仕事に精を出し、冬場は子供の学費稼ぎを口実に近くの温泉ホテルの掃除に通う。まるでサクから逃げ回っているみたいだ。

喜市は陽気な話好きで、大声で笑い、家にも客が多かった。去年の夏、亡くなるとふつつりと訪ねる人が絶え、まるで騒がしい夏の真ん中に、坂木の家だけが音を消し去ったように静かになったのだ。絵実子は賑やかなこの家しか知らない。夏に訪れるたくさんの親戚や自身の子供たちの声があふれていた居間にサクと向き合って昼食を食べていると、耳が聞こえなくなったような錯覚に陥るときがある。ときおり乾いた咳をするサクも、自分の耳をうたぐって音を出しているのではないだろうか。

正輝は遅番かい？ そうだね、十一時すぎるね。今日は早番だね。うん、もう帰るよ。

ほとんど毎日、同じ会話を繰り返している。夫の正輝が帰ってきてても来なくてもあまり変わりはない。夫は亡くなった舅譲りでサクにも良く話しかけるが、ああ、とかそうかい、程度の返事をするだけだ。母さんはもともと口数が少ないから、というのが夫の話でおかしいとも思っていないようだ。

嫁に来てから四半世紀もたち、実の親より長く暮らしているのに気ごころもしれず、距離は少しも縮まっていなかった。絵実子は亡くなった舅が恋しかった。どんな話でも冗談に変えてしまい、大声で笑い飛ばす。あきれながらもサクもつられて笑っていた。あの頃のサクは声を出して笑っていたのだ。

この二十五年間、嫁姑の諍いに悩まされなかったのは、喜市のおかげだったのだ、と思い知らされた。脳溢血であっけなく亡くなったのも、いかにも喜市らしい潔さだった。

急に残されたものだけが、踏ん切りがつかないままでいる。

サクが母屋にはいるのが見えた。

グラジオラスを手向けながら、サクも同じことを喜市に愚痴っているかもしれない。

絵実子はやっと立ち上がった。夏は日陰に隠れていても音がとりまく。ああ、暑い。

カスカス、という乾いた音とともに、坂道を古ぼけた軽トラックがほこりを巻き上げおりてくる。隣近所のものではない。あの音には聞き覚えがある。

とっさにインゲン畑のほうへ身を隠した。油の切れた音をたててドアが開き降りてきたのは、町の反対側に住む久米のバアサンだった。七十四歳のサクと同年代らしいが無駄のない歩きっぷりと派手な花柄のブラウスでずっと若く見える。町でも豪農で知られ、祖父母の代から顔役のこの老女は、いろいろな意味で有名だった。付き合いの狭い絵実子でさえ、あちこちでホントだか噂にすぎないのかわからない話を聞かされる。

まずはうなるほど金があるのにケチであること、どこにでも顔を出しずけずけと話すのでトラブルのもとであること、大人しい旦那と長男は使用人扱いだということ、中でも良く話にあがるのは、自分で選んでたいそう自慢だったという嫁との壮絶な喧嘩のあれこれだ。絵実子は子供の学校で顔見知りだったし、農家の嫁の集まりである「若妻会」でも何度か会っている。

大学出だというその嫁は、勢いもよく人前ではっきりと意見を言える人だ。絵実子自身は遠巻きに眺め、頭を下げる程度だった。やけに偉そうで生意気だという年寄も多いが、あのぐらいでないと久米のバアサンにいびり殺されるというのが一致した意見だ。罵り合うとか、モノが飛び交うが、お互いケチなので壊れないものばかりだとか、まことしやか にさきやか されている。

どこの家でも同じような争いはあるものだ。小さな町ではそれが誇張されて広がる。

ふと、自分とサクのように腹のうちを探り合うよりましなのではないか、と思った。

トマトの茂みに戻り、日にさらされ茹でたように熱いトマトをもぎはじめる。

凍る直前にまで冷凍庫に入れた完熟のトマトに、砂糖をかけたのがサクの好物だ。嫁にきた当初は驚いたが、今では絵実子にとっても夏の味だった。冷たさとシャリっとした食感が喉をとおっていくのを思いだし、つばを飲み込んだ。

それにしても久米のバアサンが一体、何の用だろう。サクと茶飲み話をするような間柄ではない。手に持っている包みは？ 手土産なはずはない、舌も出さないと評判だ。

とがった顔のなかの小さく油断のない光を放つ目が思い出される。ひと睨みされただけでも絵実子は身体がきゅっとなった。先日、サクの代わりに出た夏祭りの婦人会でのことだろうか？ 絵実子に不満があって、サクに小言を浴びせているのではないか。

トマトの熱さに手が止まる。あちち、手のうえで軽く転がす。まるで焼いた餅だ。

餅？ 餅のことかもしれない。

毎年、夏祭りの準備は婦人会の受け持ちでいつもはサクが参加していた。

今年からあんたが行って、とサクに言われたときは驚いた。農家の嫁はたいがい「若妻会」なる気恥ずかしい名前の組織に参加しており、どこから「婦人会」に移行するのか分からないままでいた。婦人会の年齢層は高いが、たまに若い人もいる。隣のお婆さんによると、ああ、絵実ちゃんのだになったんだね、と言われた。

「おばさん、それってどういうこと？」

「あんたが坂木の主婦になったってことさ。喜市さんが亡くなったから。サクさんは楽隠居だワ。うらやましいねえ。息子に嫁が来ないばっかりに

サクさんより五つも年上のあたしが、死ぬまで夏祭りの手伝いだ」

「そんなの。出かける楽しみもあるだろうに、やめなくてもいいのにね。父さんが死んだからって母さんまで…」

「サクさんにしたらそのほうがいいんだよ。なかには会いたくない人だっているだろうさ」

隣のお婆さんは含んだ笑い声をたてた。確かに口の重いサクが、大勢のバアサンに囲まれてうつむいている姿は想像できる。あたしだって嫌だ、と絵実子は思った。

夏祭りにはヨモギ餅を作って売る。これは婦人会の大きな収入源で、評判もいい。

春にヨモギを摘んで冷凍するのは「若妻会」の仕事だった。会館に着くと細かく切られたヨモギのいい香りが漂ってくる。夏祭りのヨモギ餅は大量に売られ、町中の冷凍庫に常備されている。絵実子の家の大型冷凍庫にもまだ残っていたはずだ。それでもやはり買い込むのだ。おかげでどこに行ってもお茶請けにヨモギ餅が出てくる。

隣のお婆さんが絵実子をみんなに引き合わせてくれる。ほとんど顔見知りばかりだが、婦人会に属すると主婦として一人前ということらしい。嫁と姑が同じ会でないということは、どちらかが留守番をすることができるなかなか合理的なやり方だ。こうやって世代交代をしていくのだ、といささか不思議な気分だった。カセットコンロが置かれ、あちこちの蒸し器から湯気が上がってぼおっとなるほど暑い。言われるがまま、洗い物や水運びをする。ガタガタと餅つき機が揺れる音、杵と臼でついている人達もいる。こちらは農協職員が手伝いに入っていた。いっぺんに喋り、いっせいに返事をかえす騒がしき。絵実子は頭がくらくらとしてくる。水をかぶりたいほどの熱気だった。

「三番だ、三番の米が蒸けない。誰だ、誰か餅を蒸かせない女がいるんでないかい」

野太い声に何十もの口がつぐまれた。あたりが静まりかえる。

この声の主が久米のバアサンだった。餅が蒸かせない女。

絵実子はのぼせた頭がひゅうんと冷えていくのを感じた。

真っ白な三角巾で髪をくるんだ久米のバアサンは、三番と書かれた蒸し器のまわりをぐるり、と見渡す。きりりとあがった眉に黒く光る眼が一人、一人をねめつけるように移動する。まるで犯人を追い詰める刑事のようだ。

「あんたか？」

指差されたのは、絵実子より若い女だった。確か昨年、息子のアレルギー治療のため、都会から移住してきたとかいうその女はぼかん、と口をあ

け、首を横に振った。何を言われているのか、わからない顔だ。

「たまにそばにいただけで餅米が蒸けないたちの女がいるんだ。あんた、赤飯蒸せるか？」

「私、あの、炊飯器で炊きますけど……」

途切れ途切りに答える女は、金魚のように口をぱくぱくさせている。

久米のバアサンはせせら笑った。話になんないね、赤飯を炊飯器で炊くだと。

「あんた、餅がつきあがるまで、部屋から出ていきな。売りものにならない餅ができるからね。蒸し器のそばに近づくんではないよ」

女は顔を真っ赤にし、手を握ったり開いたりしながらジリジリと後ろに下がっていく。

「この人じゃない、わたしです」

絵実子は思わず女の前に立ちふさがった。久米のバアサンは絵実子を上から下まで見る。

声はふるえていたが、言葉は詰まることなく出てきた。

「忘れてたんです。すみません。もち米の近くには寄るなど言われてたのに」

それは嫁に来たばかりの年末の餅つきのときわかったことだ。サクに教えてもらい米を蒸したが、一時間たっても蒸しあがらない。下のほうは水を吸いすぎて潰れ、上は生米という状態のままだった。サクは、理屈は分からないが、なぜかもち米を蒸せない人がいる、年寄りが「もち米と相性が悪い」という言い方をする、あんたがそうらしいねと言った。

赤飯も同じだ。何度か試したが結果は同じだった。仕方ないよ、でも本当にそんな人がいるんだね、とサクは笑った。

毎年、坂木の餅つきは喜市のよーし、始めるぞお、絵実子を隠せという号令と笑いとともに始まった。婆さんが先に死んだらよ、うちじゃ餅も赤飯も食べなくなるなあ、そうも言って笑っていた。今年の正月にはお供えと雑煮用を少し餅つき機で作っただけだ。

サクが暴れるような音のする機械の横に痛む足を片方投げ出して、ひっそり座っているのを、絵実子は台所の隅っこから見ていた。

「奥さんじゃないですよ。相性悪いのわたしなの。今、出ていきますから」

絵実子は女のからだをぐいと押し、部屋を後にした。

「農家の嫁がもち米も蒸かせないんじゃ、役には立たないね。サクさんも気の毒だ」

太く低い久米のバアサンの声が背中に降りかかる。

「奥さん、ありがとう」

追いかけてきた女が泣きそうな顔で絵実子を見た。

「なんも、わたしが忘れてたから悪いんさ。ほんとになんの手伝いにもならないね。

奥さんにも嫌な思いさせたね。婦人会に出たばかりなのに、姑に叱られる」

絵実子が笑うと小さな声で、わたし、田島の家内の沙保里です、よろしくお願いしますと言った。

地味にしているが、どこかあか抜けた沙保里にそう言われたとき、なにが温かいものを感じた。心細い思いをしているのは絵実子ばかりではないのだ。ましてや、人前で罵られたら泣きたくもなるだろう。顔と名前は知っていたが、久米のバアサンは噂通りの女だと思った。あの野太い声でまくし立てられたら、絵実子では太刀打ちできない。

「あれって、ほんとなんですか？ もち米が蒸かせない人って。ただの嫌がらせじゃ……」

「ほんとなんだわ。わたしがそうだから。なんでかわからないんだけどね。亡くなったじいちゃんね、なん百年も前になけなしの百姓の正月のもち米を取り立てていった庄屋の子孫が祟られたんだって言うの。お前はその子孫だって。でもなんでも冗談にしたひとだから、ただのウソ話だよ」

沙保里はようやく笑い顔を見せた。素顔がやけに子供っぽい。

部屋の中からはできたの、蒸けただのと声が響いていた。けたたましい音の洪水だ。

日陰には涼しい風が吹き、絵実子は深呼吸をして新しい知人を促した。

「米は蒸かせないけど、餅丸めはできるの。それぐらいやらないとまた、怒鳴られるね」

田島沙保里は絵実子のそばを離れず、まるで盾のように小柄な絵実子の陰に隠れていた。

餅を丸めるのは初めてらしく、絵実子はなんども繰り返してみせた。子供のころからさせられているので慣れたものだ。実家ではいっせいに並んで競争し、一等賞だとみかんが特別にもらえた。大人も子供も大騒ぎで賑やかだったものだ。

実家の母と姑はどうだっただろう？ 祖母はしつけにはやかましかったが、孫には優しくかった。ただ、母が物陰でうつむいているのはなんどか見た記憶がある。絵実子自身、同じようなことがあったとき母のその姿を思いだしたのだ。

湯気や汗にまみれ、屈託なく笑うここにいる女たちの誰もが体験したこ

とに違いない。

わかってはいるけど……。

ヨモギのにおいが部屋中に満ち、たまにふるまわれる冷たい麦茶で喉を潤しながら、どの手も口も忙しく手早く餅を丸めていく。瞬く間に三個入りのパックが山積みになっていった。

「餅は蒸かせないようだけど、丸めるのは早いねえ。手慣れたもんだ」
久米のバアサンが通りすがりに立ち止まった。

「坂木さんとこの嫁さんは、実家は隣町の大井さんだってね」

はあ、と絵実子は頷いた。田島沙保里は絵実子の陰に身を隠すように縮こまっている。

「あんたの母さんは所帯持ちがいい働きもんだって評判だった。あたしは学校で一緒だったんだよ。仲が良かったものさ」

そうですか、と絵実子は用心深く返事をした。妙な警戒音が鳴っている。久米のバアサンの意図がわからない。母から聞いた記憶はなかった。

「久米のルツ子と言えは覚えているよ。あたしは総領娘で婿取りしたから。里帰りしたらよろしく言うておいて」

絵実子はなんとか笑顔をつくり、ハイと答えた。バアサンはじろりと絵実子の隣の沙保里に目を向けて、大きさがまちまちじゃないか、と小言を浴びせて立ち去った。

絵実子と沙保里は顔を見合わせふうっと息をつく。

「コワイです。わたし睨まれたみたい。久米さんのお嫁さんからよく聞かされてたけど」

沙保里は上の子が久米のバアサンの一傘下の孫と同じだ、と言った。嫁と親しいと言う。

「慣れない私たちにとても良くしてくれて。でもお姑さんのことは我慢なんかしてたら気が変になるから徹底的にやるのって。あのお姑さんと対戦するなんてすごい」

「かえって同じぐらい元気なほうが良いんでない？ お互いそれですっきりして」

もぐもぐと口のなかに詰め込んで目も合わせないあたしたちより、と続けたい言葉を飲み込んだ。でも、と沙保里はさらに小声で囁いた。

「自分たちだけで家を建てるように算段してるって。やっとなんかさんを説き伏せたらしいです。食事の支度をしているときに目の端に姑さんが入ると、包丁持つ手が震えるっていうんです。限界だって。コワイくないですか」

限界？ 別に暮らす……。逃げ回っている絵実子。どんどん暗くなって

いくサク。

朝の早いサクが一階でたてる物音が嫌で布団をかぶる絵実子、まっくらやみで音が消えた世界にオキロ、オキロと鳴る目覚まし時計が忍び込む。体も布団もやけに重くて暑い。

夏のたてる音は嫌いだ。耳がイガイガしてくる。

どうしてこんなにもサクがうっとおしいのだろう。

限界？ 限界ってどのぐらい？ 限界になったら何がおきる？

あの膝では何年かしたら寝たきりになるかもしれない。痴呆症になったら、絵実子はサクを見ることが出来るか？ 毎日、向い合わせで息を詰めながら、絵実子は一人問い続けているのだ。夫には言えない。言えることなどなにも起こっていない。もめ事などない。

「坂木の嫁さんよ、あれ、ウソなんだろ？」

ぼんやりと帰り支度をしている絵実子の後ろから低い声がする。

久米のバアサンは派手な帽子をかぶり、すり寄るように立っていた。背の高い老婆だ。

「もち米が蒸かせないって話さ。あの田島とかいう女をかばったね」

絵実子があっけにとられ、ほんとです、という薄唇をひんまげて笑い顔をみせる。

まあ、いい。わかってるんだよ、と言い捨てバアサンは背を向けていった。

一步も無駄にしない、とばかりすたすたと行く。その合間に回りに挨拶を返している。

なかなか見事なバアサンだ。あれだけ思ったことを口にできたらさぞ気持ちがいいだろう。言われたほうはたまったものではないが。包丁を持つ手が震える…。

いやいや、絵実子とは無関係なことだ。これからも婦人会で顔を合わせるのなら、適当に流しておかねばならない。現に目を付けられたみたいだ。

派手な格好のわりにひどく古ぼけた軽トラックにバアサンは乗り込んだ。カスカス、という息も絶え絶えのような音をたててようやく走る。なるほど、すべてをこき使う。

それでも皆が言うより絵実子は久米のバアサンを嫌だとは思わなかった。

絵実子は母屋を伺うように背を伸ばす。丈の高いインゲン畑から母屋までは三十メートルはある。声など聞こえるはずもないのに聞き耳を立てた。ミンミン、ジーコロ、ウワン、ガサガサ、パリパリ。ガサガサ？

「絵実ちゃん、久米のバアサンが来てんじゃないの？」
畑続きの隣のお婆さんだった。境目のイチイの茂みをかき分けてきたのだ。

変化の少ないこの町で、隠し事はほとんど無理だ。

絵実子が頷くと、やっぱりと、したり顔を見せる。

「金、捻るほどあるってのにさ、あの軽トラ。走っているのが不思議だよ。どこを走っていてもわかる。なんだろうね、喜市さんの葬儀にさえ息子を寄越したのにさ。わざわざサクさんのところに来るなんてね」

声はやけに弾んでいる。気のいいお婆さんで世話好き、噂好きだ。手にグラジオラスの真っ赤な花を抱え、おすそ分けを口実に好奇心を満足させる気だ。(またグラジオラス)

サクの数少ない話相手だが何時間も居座るので疲れる、とこぼすこともある。

「わたしのことかな？ ほら、あの餅が蒸かせないって」

「ほんなこと、たいしたことでないよ。あの人にしちゃ、愛想が良かったじゃないか」

あれで？ 田島沙保里に対する態度よりは、確かにましではあった。

そう言えば、夫が遅番で二人きりの夕飯をとっていたとき、サクがぼそりとあんた、久米のバアサンにたいして気にいられたってね、とつぶやいた。いや、餅が蒸かせなくて部屋から出された、と答えると、上目遣いに絵実子を見上げた。おびえたような腹出たし気な表情だった。……それでもあのバアサンが人、褒めるの初めて聞いたとき……。

ひと様にはいい顔して、とでも言いたいのか、と思った。いや、なんもさ。

この返事もどうだ？ どうして二人で話すところもぎくしゃくとしてしまうのか。

喜市がいたらなんて言っただろう？ めったにないことだ、褒められたら高くつくぞ、とか、天地がひっくりかえると笑うだろう。わたしもばあちゃんも頼りすぎているのだ。

誰かがうまく空気を変えてくれることに。誰かがちゃんと変換して伝えてくれることに。

朝、一番で採ったインゲンがまた伸びている。芋と煮付けるか。それもサクの好物だったことを思いだし、ふうと息をついた。

隣のお婆さんは絵実子の横で、ちらちらと母屋を伺っている。気になってしょうがないのだろうが、行くだけの勇気はないらしい。

「お婆さん、インゲン持っていかない？ 朝にも一度、採ったんだけど」

「もらおうかね、息子が好きだからなんぼあってもいいよ。
それよりあんた、聞いたことある？ サクさんとき、久米のバア……」
お婆さんの声は母屋からのばたん、という音と叫び声にかき消された。
久米のバアサンが玄関から飛び出し、サクがなにか棒のようなものを振り回して追いかけている。やめれ、というかすかな野太い声が聞こえる。
ありえない光景に日にやられたかと思った。ばさり、とグラジオラスが足元に落ちた。

隣のお婆さんは呆けたように突っ立っている。

とっさに思いだしたのは、サクの膝のことだ。あんな勢いで走って膝は大丈夫なんだろうか？ なにを振り回しているんだろう？ いや、なにをやっているのだ？

絵実子はかごを抱えたまま、野菜畑を駆け抜けた。伸びた葉や枝がぎっ、ぎっと身体をさえぎる。トマトの枝がむき出しの頬をひっかいた。

それほど距離でもないのに、いつまでも声までたどりつかないような気がした。

かごを置くとサクの前に回って腕をつかんだ。七十過ぎのサクが振り回していたものは朝抜いたゴボウだった。今年は出来がよく、太くてぴんと張りがある。サクはがっしりとゴボウを握り、腕をつかまれてもまだそれをうならせていた。

手土産だろうか、玄関先のあちこちに水ようかんの缶が転がっていた。

「ばあちゃん、なしたのさ。やめなさいって」

サクがこんなに大きく見えたことはない。肩で息をしながら靴をもったままへたりこんだ久米のばあさんを、絵実子が見たこともないような顔で睨みつけた。

「これがなんて言ったと思う？ 自分とこの嫁とあんたば交換するべって。金も出すからだど、馬鹿にするんでないよ、そんな話あるかい」

サクがこんなに長く話したことがあっただろうか。それもこんな大きな声で。

「交換って、交換？ なにを……」

冗談だべさ、そんなこと、とあえぐ絵実子にサクの身体がのしかかる。

「このババが一銭にもならない冗談なんか言うか。どこの世界に嫁売る家があるもんか。

あんたば擦り切れるまでこき使う気だ。帰れ、この」

だから、冗談だって。落ち着いて……。

「冗談なもんか、前は亭主をよこせって言ったんだ。この女は。

金で買えないものばかり欲しがらんだ。いっつもあたしのものばかり」

サクは、その場に崩れこんだ。亭主って……。
久米のバアサンは、四つん這いになってトラックのほうへ逃げていく。
サクはなおも絵実子の置いたかごから、トマトを掴み、バアサンに投げつけた。
夏のおとがいっせいに聞こえなくなり、時がわずかに止まる。
サクが自分の心臓を掴んで投げつけたように見えた。
ひとつ、ふたつ、みっつ。
たしかにみっつ目の心臓はバアサンの背中に当たった。
「あ、命中した」
「ほんとにか？」
絵実子は思わずサクと顔を見合わせた。
トラックがほこりをたてて消えていく。ガタリともカスカスとも聞こえない。
蝉がふたたび鳴きだしたとき、血にまみれたように赤いサクの手を絵実子はいつまでも撫でさすっていた。